

アジア・太平洋研究センター主催，総合政策学部共催講演会 ＜シリーズ「朝鮮半島を俯瞰する」第2回＞

日 時：2020年10月15日（木）

場 所：南山大学 オンライン講演会

テーマ：自力更生と核——金正恩の挫折と正面突破

報告者：井上 智太郎（共同通信平壤支局長・北京特派員）

シリーズ「朝鮮半島を俯瞰する」第2回講演会は，共同通信の井上智太郎平壤支局長に講演をお願いした。北朝鮮は新型コロナウイルス対策として2020年1月末より外国との交流を遮断しており，そうしたなかで10月には建国75周年を記念する軍事パレードが行われ，新型兵器が登場するなど今後の北朝鮮の姿勢が注目された。とりわけアメリカの大統領選挙の結果と北朝鮮の動向は世界中の注目するところだ。こうした状況を北朝鮮はどのように見ているのかについて北京から報告していただいた。概要は以下の通り。

米大統領選でバイデン前副大統領が勝利を確実にしたことで，トランプ大統領との直談判で対米関係の転換を図った北朝鮮の金正恩（キム・ジョンウン）朝鮮労働党委員長のもくろみは外れ，米朝交渉は事実上，振り出しに戻った。米次期政権が圧力強化に動けば，大陸間弾道ミサイル（ICBM）発射実験再開など強硬姿勢に転じる可能性がある。

金正恩氏は3回にわたりトランプ氏と会談したが，制裁解除などの成果を引き出せなかった。それでも親書の交換を続け，個人的な関係維持に腐心した。トップダウンを好むトランプ氏との交渉再開への期待があったのは間違いない。

これに対しバイデン氏は，トランプ氏が「悪党」を受け入れたと批判。まずは多国間で北朝鮮への制裁圧力を強化し，積み上げ方式の非核化交渉を迫るとの見方が多い。

北朝鮮は来年1月初めに党大会を開催。この場で新たな対米戦略を定めるとみられる。今年10月の軍事パレードでは，新型のICBMや潜水艦発射弾道ミサイル（SLBM）を公開した。開発の進展具合は不明なものの発射実験を暗に予告し，次期米政権をけん制する意図は明らかだ。

一方，北朝鮮関係者は，バイデン氏が10月の候補者討論会で首脳会談の条件とし

て「核能力の縮小」を挙げた点を指摘。「完全非核化と言わなかったことに注目している」とも語った。核放棄には応じず、事実上の軍備管理交渉に持ち込む狙いがうかがえる。

(文責：平岩 俊司)